

『北関東系土器』の様相と性格

小 高 春 雄

目 次

1. 序	137
2. 研究史	137
3. 北関東系土器の様相	140
4. 北関東系土器の性格	155

序

千葉県北部より出土する弥生土器の一群について、それが南関東の編年でわりきれないことから、研究者の多くはいわゆる「北関東系土器」という呼称を提唱し、踏襲してきた。「北関東系土器」とは、その研究の当初から、隣接する茨城県側の土器と密接な関係にあることが指摘されてはいた。しかし、茨城県における弥生時代の研究は、主に県北において推進されてきたこともあり、千葉県と直接接する南部については、ほとんど資料報告さえない状況であったといつてよい。ところが、その一方で、千葉県北部では、年々調査例が増加し、量的、面的に資料の蓄積が進んでいる。これは、「北関東系」と呼んできた土器群にとって、一面では不幸な、また、皮肉な現象である。資料の増加は当然のことながら多くの論考を生んでいる。しかしその複雑性のゆえか、混乱がみられることも事実である。問題の核心はやはり解釈の仕方そのものに関わってくるかと思われる。ここでは、私の限られた能力と、現在の資料的水準から問題解明に迫ってみたいと考えている。

研究史

千葉県における弥生土器の編年的研究は、長い間、南関東の枠内において考えられてきた。それゆえ、須和田遺跡における「北関東系土器」の発見に注意することはあっても、それが大きく問題となることはなかったのである。^(註1)ところが、昭和36年の菊池義次氏の報告は、以後の研究に一転機を与えることになったといつてよい。^(註2)「当初考えた如く、南関東系弥生を主体として、客体的に北関東系弥生が混入しているという状態よりは遙かに強いものであるし、一中略一むしろ本地域をもって、両者の混交地帯とみるのを至当とするかもしれない。」、本地域とは印旛、手賀沼周辺のことである。菊池氏は断言してはいないし、また、この問題が将来の研究に待たれることを強調している。昭和41年、海老内台遺跡の調査報告は、^(註3)氏の予測を裏づける結果となった。出土した弥生土器は多く北関東のもので占められており、それは、報告者をして「現在までに発見・報告例のない東関東における後期の竪穴住居址を発掘」したという発言に示されている。同様な事情は、昭和43年の「弥生式土器集成」^(註4)においても同様である。杉原莊介氏は、「南関東第Ⅲ様式に伴う特殊な土器」として、この北関東系土器を位置づけている。海老内台遺跡の報告以来、発掘調査の増加と比例し、その報告も漸時みられるようになった。しかし、未だ資料不足のゆえか、既して知られている茨城県の土器にその類似性を求めていった。長岡式土器、十王台式土器、長岡系土器、長岡式相当土器、北関東系近似の土器といった呼称はそのような事情を反映したものといてよいであろう。

昭和49年に至ると、いくつかの注目すべき論考、報告があった。まず、柿沼修平氏は、印旛沼周辺という限られた地域ではあるが、既に発見されている北関東系土器の編年の概略を示し、それらが、後期以降の所産であることを述べている。^(註5)次いで、古内茂氏は、「房総における北関東系土器の出現と展開」と題し、様々な問題点をまとめている。^(註6)千葉県における北関東系土器の出現が宮ノ台期に求められること、また、その下限が一応、前野町期としながらも五領期まで下る可能性を述べている。そして、各遺跡から出土したこれら北関東系土器にたいし、「広義の長岡式土器の範疇でこれらはとらえられる」ことから、「長岡系土器」と便宜的に呼びたいとしている。氏は、飯重新畑遺跡出土の甕形土器に注意しながらも、「類似するような資料もあまり知られていない」ゆえか、この時点では折衷型をなす一群について言及していない。ところが、やはり同年、この折衷の土器についても、それが南関東地方の土器編年のなかでとらえられるであろうという熊野正也氏の報告があった。^(註7)熊野氏のこのような考えは、昭和50年、同51年^(註8)の報告においても同様であるが、同53年、新たに臼井南遺跡出土の土器を主体とするこの種の土器にたいして、「臼井南式」という型式名を与えている。そして、その性格は、「種々の共通性から神奈川県・朝光寺原式土器や埼玉県・吉ヶ谷式土器、群馬県・赤井戸式土器と同様のもの」であると規定したうえで、その共通性とは「久ヶ原式土器の分布圏をとりまく周辺の狭い地域に分布すること、出現時期は久ヶ原期かもしくは若干新しい時期で大差はないこと、煮沸形態の甕形土器は台付でないことなどである。さらに、土器はそれぞれ周辺の影響を微妙に受け入れながらつくられている」ことであるとしている。熊野氏の見解はともすれば編年作業に偏りがちな研究動向に広い見地から北関東系土器の一群を規定したものとして評価されよう。昭和52年、深沢克友氏は、東寺山石神遺跡の報告において、北関東系土器の出土遺跡を集成し、研究史にふれたうえで、出土土器の編年的位置づけを行っているが、更に翌年には、「北関東系土器を共伴する遺跡が印旛・手賀沼を中心とする地域に集中」しているとして、印旛・手賀沼系式土器という新たな型式名を提唱した。^(註12)その設定の理由は、「従来言われてきた北関東系土器文化圏に属する文化期が後期全搬にわたるものではないということを再認識するためと、少なくとも久ヶ原期後半の印旛・手賀沼周辺地域においては、久ヶ原式土器文化の影響を強く受けた1つの文化期が存在していたことを示す」ためであるという。氏の持論の中心をなすものは、「印旛・手賀沼系式土器文化は久ヶ原期後半期に位置づけられるものであり一中略一弥生町期から前野町期を迎える時点においては、すでに印旛・手賀沼系式土器文化は終焉を迎えていた」ということであって、その論拠のひとつに、「印旛・手賀沼周辺地域から出土する土器の多くは、久ヶ原式土器の中でも煮沸形態の機能を有する甕形土器の製作技法を受け容れたものと考えざるを得ない」ということを挙げている。深沢氏の提唱する「印旛・手賀沼系式」は、北関東系土器を広く総称したものであるが、遺跡数に比して良好な資料を提供した遺跡が少ないこと、

それが調査地域の偏りとも相まっている状況下でなされたことをみておく必要がある。昭和54年、田村言行氏は、北関東系土器文化の内容には未だ課題点が多いことを挙げたうえで、とりわけ施文工具の分析を通じてその解明に迫る試みがあった。南関東と下総北部にみられる土器を比較すると、結節文に決定的な違いがあり、それは、附加条の原体を用いるかいなかに原因があることを述べている。また、「江原台、および周辺出土の弥生式土器の位置づけ」と題し、編年観を示している。その内容は多岐にわたるが、頸部に輪積み痕を残す特徴的な久ヶ原式の甕形土器から、次第に胴部中位以下に附加条縄文を施す甕形土器へと、また、「単純なものから、より装飾的な方向へと移向する」傾向をつかみとれるとしている。更に、壺形土器の稀少性にふれ、それを生業（畑作の優位性）との関連でとらえようとした。田村氏の説は現在においても影響するところ大であり、附加条縄文の分析は特筆されよう。昭和56年、柏市周辺での調査を多く手掛けてきた飯塚博和氏は、「柏市域で発見されている土器群には、南関東的要素を持つ土器が組成として含まれておらず、臼井南式との間に一線を画することができる。」とし、さらに、「それは、長岡式、あるいは長岡式に先行する長岡系統の土器群に含まれる」と述べている。^(註14)それは結果として、ひとつの地域差、つまり、「この地域の土器群が臼井南式土器の変遷とは別系統の過程を保持する」ことになる。昭和58年には多くの報告・論考がある。まず、加藤修司氏は、新たに成田市関戸遺跡、及び、八千代市権現後遺跡の調査結果をもとにいくつかの提案を行っている。^(註15)氏は、深沢氏のいう印旛・手賀沼系式土器（略して印手式と呼んでいる）には、「複雑な系譜をもつ異時期、異器種の土器があり、一中略一、型式として説明できるとは思えない」と述べ、その分布範囲が現状では印旛沼周辺地域に限られるとしている。また、その母胎となるものは複数の中期の土器群であろうという。次に、筆者である小高は、この種土器群の地域差の存在をまず確認したうえで、南北両系統の土器の共伴例から広く、その編年の位置づけを行おうとした。^(註16)今回の内容と多分に重複するところも多いので、各項ごとに関連する点は説明している。北関東系土器における地域差の認識は、大沢孝氏においてより詳しく論じられている。^(註17)氏は、北総地域を四つの分布圏に分け、臼井南式土器と呼ばれていた土器群は、印旛沼南東部に存在する一タイプであると結論づけており、その編年の序列は、宮ノ台式—佐野原Iタイプ—大崎台タイプ—臼井南式であるという。また『南関東の影響が強いと思われる甕系統の輪積み成形痕をもつ土器、北関東の影響が強いと思われる甕（壺の誤まりか、筆者捜入）系統の複合縁主体の装飾的色彩の強い土器、この二者をもって「臼井南式」と考えたい』としており、「臼井南式土器」を積極的に肯定してゆこうとした。浜田普介氏は、柴町あじき台遺跡出土土器をI群、II群に分類し、『単位文様から見る影響関係は「あじき台I群」が二軒屋式、久ヶ原式に大きく、「あじき台II群」は二軒屋式、長岡式、東中根式が大きく作用しているかもしれない』とした。更に、その結果から、『「あじき台I群」と「あじき台II群」は時間的に影

響を受ける疎密が存在しており、前者が南関東鬼怒川（利根川）流域に大きく、後者が常総台地の影響下にあったことを窺せている。』と述べている。^(註18)ともあれ、利根川沿岸の土器群が、二軒屋式土器といった栃木県南部地方と関係を有していることは本例によっても疑いえないであろう。昭和60年、熊野正也氏は、再度この問題にふれている。^(註19)その内容は以前と変わるところがないのであるが、田村氏の説を更に発展させたともうけとれる臼井南式土器という「小地域土器分布圏」の成立を、畑作という「生活基盤上の相違」にあると結んでいる。

以上、研究史を省みてきた。「北関東系土器」の理解は未だ人によって異っており、「印旛・手賀沼系式土器」、「臼井南式土器」という型式設定も明快な答えとはなっていない。ただ、加藤氏や大沢氏、また、浜田氏等、最近の論考には以後の研究を指し示すべきものがあるといえよう。

北関東系土器の様相

北関東系土器とは 北関東系土器とはいうまでもなく、南関東の土器群と異するという意味であったが、この判断は多分に直感的であったといつてよい。しかし、一般的な見解として、茨城県あるいは栃木県の土器と近似しているもの、あるいは、南関東の土器との折衷的な要素を有している土器を指している。筆者もまたそれに従っておきたい。

この「北関東系土器」の様相を理解するには、まず、(1)どのような土器が(2)どの地域に、(3)どの程度の期間にわたって存在したのかという点を明らかにする必要がある。簡単なことではあるが、型式認定（型式議論はさておくとして）をするうえでの基本となるべき事項といつてよい。つまり、形式、分布、時間を把握することである。この観点に立って千葉県北部の状況をまず見てみよう。

現在までに確認されている北関東系土器の内、略その形を復元できるものは約300個体に及んでいる。その器形は、甕形土器、壺形土器、無頸壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、坏（皿）形土器等であるが、もちろん、どちらの器形ともとれるもの、あるいは、従来の器形概念に該当しないものも存在する。その文様の特徴には、(1)頸部～胴部上位を無文とする以外に、櫛歯状工具による渦文、鋸歯文、波状文、孤線文、格子目文、木目状文、重四角文、懸垂文を施し、(2)胴部には異状縄文や撚糸文を、そして両者の境界には(3)縄文のみの他に、櫛歯や沈線による横帯、結節文、結束文で画するなどの特徴を挙げることができる。更に(4)底面に木葉痕や布目痕がみられることも挙げてよいだろう。また、胎土や焼成の点からみると、(1)石英粒の混入（とりわけ大形の壺形土器）、(2)薄手で堅い（甕形土器）という特徴をあげることができる。この他に南関東の土器の器形に、上記の文様を施す土器が存在する。いわゆる折衷型土器である。こ

れら北関東系土器群は、各地域によってまた多くの差が認められる。

次にその時間的な幅はどうであろうか。型式編年が確立している茨城県北部と比較してみよう。足洗式比定土器は、成田市関戸遺跡や東金市道庭遺跡で良好な資料が出土している。そして、後期に至るや、長岡式土器、長岡式類似土器は広範に出現し、現在確認されている北関東系土器の多くを占めている。ところが、後期末葉の十王台式の段階では、激減し、まとまった資料は確認されていない。このように、北関東系土器は、時間的に、弥生時代中期～終末期に至るまで、認められているが、その出現については更に溯ることが予想される。

次にその分布であるが、北は野田市寺後遺跡例を最北とし、西は市川市から、東は銚子市、南は木更津市～夷隅町を結ぶ県南中央部にまで及んでいる。しかし、そのあり方には大きくみて次の5通りのケースがある。

- (1) 北関東系土器を主体的に出土する遺跡
- (2) 単独、もしくは、客体的に出土する遺跡
- (3) 南北両者の折衷土器を主体的に出土する遺跡
- (4) 南北両者を同程度に出土する遺跡
- (5) (3)、(4)が混然となって出土する遺跡

もちろん、遺跡によっては長期間継続して営まれている場合などは異った傾向があり、それゆえ、時期的にその変遷過程をみてゆく必要がある。結論からいうと、流山市—白井町—一本埜村—大栄町—山田町—銚子市を結ぶ線より以北は(1)に該当し、市川市—千葉市—東金市を結ぶ線より以南は(2)に該当する。そして、その中間地域は(3)～(5)の様相を示しているといつてよい。

さて、以上、北関東系土器が、形式、時間、分布においてそれぞれ、型式として認めるべき内容を有してはいるものの、地域的、時間的な差が大きいことを述べてきた。それを、どうとらえたらよいのであろうか。以下その型式的位置、及び、編年の位置づけを考えてみよう。

東葛地域は長岡式土器圏 既に、研究者の何人かは、北関東系土器のある一群は、茨城県の土器に類似あるいはそのものであるとしてきた。私も、明確にそうであると思う。野田市、柏市、流山市、我孫子市の各市から出土する後期の土器は、分布からみても全く前記(1)のタイプに属し、その形態文様は長岡式土器に酷似し、南関東との折衷的要素は窺えない。人によっては、施文工具の単位等から、長岡式土器と直ちに断定することを避けているが、長岡式土器自体、昭和27年に伊藤重敏氏が調査してより、その類例は茨城県内でそれ程ふえていない。それは、恐らく、長岡遺跡の占める地理的位置（茨城県中部）と、より南西の地において調査、報告例の少ないことに関係していよう。その意味では現在認識されている長岡式土器は茨城県北部の影響を受けた、長岡式土器群のひとつであったと、すべきかもしれない。つまり、千葉県に分布する長岡式酷似土器は、広い意味で長岡式土器と呼んでよいと思う。そして、柏市鴻

『北関東系土器』の様相と性格



第1図 千葉県行政区分図

ノ巣遺跡や、中馬場遺跡、白井町捕込附遺跡^(註21)などはその代表的な出土例であるとしておきたい。この長岡式土器は、佐倉市臼井南遺跡や、間野台遺跡等でも完形、もしくは、完形に近いものが出土しており、その分布の概要を知ることができる。中期足洗式、及び後期十王台式土器は更に明確である。成田市関戸遺跡や、小見川町天神遺跡^(註22)、更には、東金市道庭遺跡出土の渦文の土器は誰もが足洗式土器と認めるであろうし、また、印西町下新田遺跡、成田市北大台遺跡^(註23)、小見川町阿玉台北遺跡出土の特徴的な文様を有する十王台式土器についてもしかりである。そうすると、前に北関東系土器とした中からまずこれらは除く必要があるだろう。そして関戸遺跡より件出した、重四角文、連孤文、木目状文等もやはり足洗式土器に伴うものとして理解すべきであり、千葉市大森第二遺跡や星久喜遺跡^(註24)、更に、城の腰遺跡等^(註25)、宮ノ台期の遺跡より出土する該種土器もその一例である。これら、型式の明確なものはまず「北関東系土器」の中から除外して考えたほうがよいということになる。

臼井南式土器 それでは熊野正也氏の提唱した臼井南式土器はどうだろうか。熊野氏は、その特徴として、昭和53年にいくつかの特徴をあげているが、ここでは昭和60年時のもの^(註19)を紹介しておこう。

- ① 壺形、甕形などの器種にとらわれず、胴部一面に縄文を施している。縄文は一ないし二条附加条縄文、あるいは撚りもどし縄文などが多い。
- ② 底部には木葉圧痕のものが圧倒的に多く、布目痕の残るものがある。
- ③ 無文帯の頭部には横走する数条の粘土紐痕を意識的に残している。
- ④ 器形的には壺形とも甕形とも識別しかねるものが圧倒的に多い。

しかし、氏が特徴とした①、②、及び、④は、長岡式土器の特徴でもあって、大沢孝氏は、別に、『南関東の影響が強い甕系統の輪積成形痕をもつ土器、北関東の影響が強い壺系統の複合縁主体の装飾的色彩の強い土器、この二者をもって「臼井南式」と考える』と規定した。^(註26)そして、南北両系統の文様要素については、『土器ひとつをとってみればそうであろうが、同じ住居址から伴出したものならば、ひとつの類型として捉え、「臼井南式」の範疇とした。』と述べている。そして、この臼井南式は、「最底二～三型式に細分されるべき時間幅をもっている。」としたが、その複雑な状況ゆえか、「編年試表」においては、後期前葉久ヶ原式土器と併行期に位置づけるにとどめている。

問題は次の2点に集約されるであろう。

- (1) 頸部に輪積み痕を有し、胴部に異条縄文を施す甕形土器は、全く南北折衷型であり、これはひとつの型式的要素として捉えられるか。
- (2) 長岡式類似土器（前期長岡式酷似土器とは異り、複合口縁は薄く、口縁下に押捺は施さず、頸部には、縄文を界する結節文がままみられる他は文様がほとんどみられない。）、折衷型土器、南関東の久ヶ原式土器が混然となって出土する状況は、(1)と合わせ、型式として把握できるのか。

(1)の点は、この土器が時間的、地域的に存在、分布し、更に、その折衷のあり方が一定のパターンを有していれば問題ないであろう。(2)の点は、型式セットとしての内容を問うもので、折衷型及び長岡式類似土器、それぞれ壺形、鉢形などの土器を伴って存在することが前提になると思われる。頸部に輪積み痕を有し、胴部（あるいは頸部輪積み痕上）に異条縄文を施す土器は、佐倉市江原台遺跡や飯合作遺跡でとりわけ多く出土しているが、更に、東総の八日市場市（山桑遺跡^(註27)）や東金市（道庭遺跡）でも出土している。しかし、佐倉以西では確認されておらず、現状では、この土器が印旛郡以東の北総地域に存在する土器であると認められる。そして、その時間的な幅は、久ヶ原期はもちろんのこと、弥生町期から前野町（五頒）期にまで及んでいる。問題は(2)である。折衷型、及び、長岡式類似土器にそれぞれの壺を始めとしたセ

ットが伴うであろうか。

折衷型の場合は、印旛村吉高家老地遺跡^(註28)や千葉市東寺山石神遺跡、佐倉市萱橋遺跡^(註29)で、それぞれ1例ずつ出土しているのみで（久ヶ原式土器の壺形土器と鉢形土器に異条縄文を施したものの）、一般的なものではない。この他に輪積み痕を残し、口縁の開いた小形の壺形土器が、印旛沼南岸地区で、比較的多く出土している。このような器形は、南関東諸型式にはみられないが、器形以外の要素は全く折衷そのものである。長岡式類似土器の場合、大形で、形になるものは非常に少ないが、破片では一般に存在する。それは一般に肩のはった細頸の壺形土器で、石英を多量に含み厚手である（壺形以外は少ない）。

そうすると、前記(1)の折衷型土器は、現状では一型式として認めがたく、とりわけ、壺形土器の僅少性はやはり問題となるところである。それに比して、(2)の長岡式類似土器こそは型式名を付して呼んでよいと思われる。

提唱者である熊野氏は「臼井南式土器」を幅広く規定したために、結果として、両者一体となった土器群を指すことになった。また、大沢氏は、一括資料を重視した結果、熊野氏の見解を再確認した。私も以前、「南北両者の特徴を兼ね備えた土器、いわば折衷型」、これを大きく下総型土器と呼び、臼井南式土器はそのひとつであると述べたことがあるし、当時の私の考えは長岡式類似土器の多くをその中に含めていた。しかし、単純に考えて、久ヶ原式土器、折衷型土器、長岡式類似土器の3者混在の土器群をもってひとつの型式名を与えることができるであろうか。

「**貼瘤**」付土器 最近注目され、また、出土例の増加しているものに、鈴木正博氏の「下大津式」^(註30)、海老沢稔氏の「宍塚式」^(註31)、川崎純徳氏の提唱する「上稲吉式」^(註32)にそれぞれ類似する土器がある。口辺部下端に貼瘤を廻らすのを特徴とするが、このような土器は、下総地方各地に分布する。鈴木氏はそれを「東中根II式位」とし、また川崎氏は、下大津式～上稲吉式への変遷を予測した。さらに、海老沢氏は、

「下大津式の土器」—「宍塚」外山遺跡の土器（上稲吉式）—「松延」の土器という二系統の変遷を示し、両者の違いは地域差であるとした^(註33)。

簡単に「型式」を付すきらいはあるが、「貼瘤」付土器が後期中葉～末葉にわたって存在すること、また、それは栃木県～茨城県南西部に共通した特徴であることは認めてよいだろう。本県では小見川町阿玉台北遺跡や、市川市須和田遺跡、更には、栄町あぢき台遺跡等が知られているが、最近では、成田市や佐倉市で良い資料が出土している。そして、それらはあぢき台遺跡および江原台遺跡例（共に久ヶ原期併行）を除くと、前野町（五領）期併行と考えられ、弥生町期との併行関係を窺う資料はない。

前野町（五領）期では、利根川沿岸においても北関東の土器の占める割合は激減する傾向が

ある。「貼瘤」付土器を上記各型式で呼ぶには未だためらうが、少なくともそれに新しい型式名を付したり、北関東系土器の名称で呼びつづけることは適当でない段階に至っている。

佐野原Ⅰ式 鈴木正博氏は、銚子市佐野原遺跡出土土器をⅠ式、Ⅱ式に細分し、それを「渦紋土器系の最終段階」ととらえたうえで、「宮ノ台式の末期に並列する」とした。^(註34)

型式の提唱と細分はともかく、その位置づけ自体は問題ないであろう。実は何年前かにこの佐野原遺跡の対岸より弥生土器が出土していることを知った。それは一見して足洗式土器としてよいものであり、当地域の土器群のあり方を再確認することになったといつてよい。この「佐野原Ⅰ式」は最近類例がふえており、とりわけ、佐倉市大崎台遺跡では良好な伴出関係が確認されている。大沢氏はこの「佐野原Ⅰタイプ」が馬目順一氏の提唱した天神原式土器に類似するとして、「太平洋沿岸の連孤文、櫛描文の系列として捉えたい」と述べている。^(註35)系列という言葉が現時点で適切であるかどうかはわからないが、太平洋岸に分布する中期末の土器群であることは間違いのないであろう。ただ、未だこれらの土器群にひとつの型式名、あるいは、編年の確立している福島県浜通り地方の型式名で呼ぶのはもちろん尚早であつて、宮ノ台式の終末まで連孤文の土器が存在するということを確認したにすぎない。

現状の整理 以上、従来模然ととらえられてきた北関東系土器を型式として認めてよいものと、その帰属の未だ不明瞭なものに分割した。これらは、その分布範囲の把握、資料不足に起因する器形の組成に難があるものの、その編年的位置づけはほぼ明らかになったといつてよい。以下その結果を整理してみよう。

	南 関 東	東 葛 地 域	東 葛 以 東 地 域
中 期	宮ノ台式		足 洗 式 (大崎台431号住) (佐野原Ⅰタイプ)
後 期	久ヶ原式	長 岡 式	長岡式類似土器・折衷型土器・貼瘤付土器
	弥生町式		同 上
	前野町式 (五領)	長岡式類似土器・ 貼 瘤 付 土 器	長岡式類似土器・貼瘤付土器・十王台式

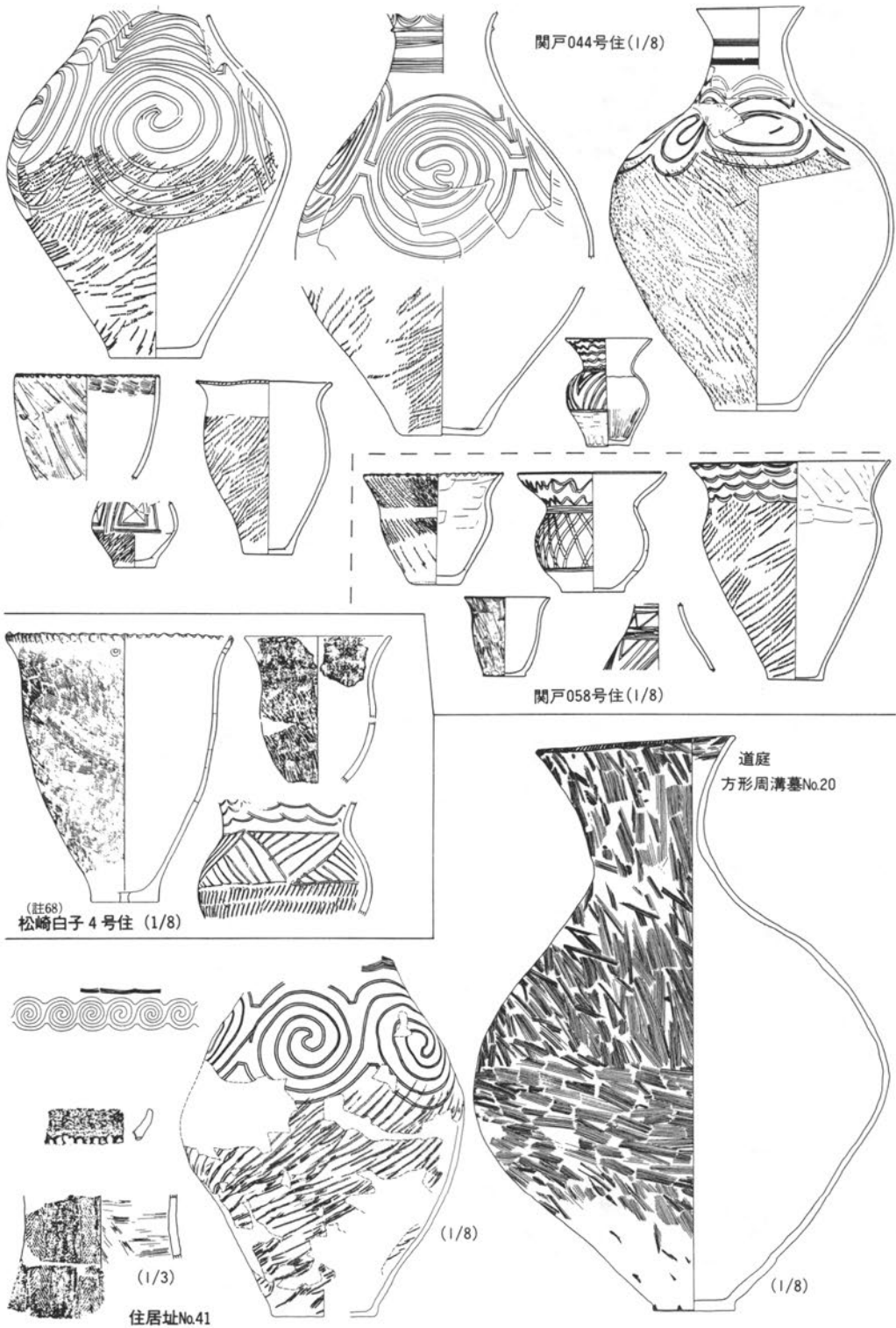
位置づけの不明瞭な土器群はどのように分析すべきか さて、今までの記述によって、現状の概略は理解できよう。問題の核心は、やはり後者、長岡式類似土器、及び、折衷型土器をどう理解

するかにある。以下、その二点を中心に論を進めてゆこう。長岡式類似土器とは、甕形土器は口縁部が複合あるいは素縁をなし、更に通常その上に縄文を施す。頸部は無文か櫛描文であり、胴部以下は異条縄文で覆うのを特徴とする。そして壺形土器は、前記したように、小型と大型があり、それぞれ口が開き頸の長い細身の土器と、厚手で、胴部上位の多少張った土器、細頸の土器が存在する。従来、これらの土器は久ヶ原式併行期と大きく捉えられていたにすぎないが、最近では大沢氏が詳しく論じている。ただ、大沢氏は折衷型土器や、久ヶ原式の甕形土器も対象にして、口縁部の特徴を中心に四つの小分布圏が認められるとした。私は、大沢氏もそうであるが、その基本となった田村言行氏の分類の仕方は、バラエティをつかむことには有効かもしれないが、時間差までは追求できないと思っている。なぜなら、甕形土器における複合口縁（あるいは素縁）— 頸部無文（あるいは櫛描文）— 胴部異条縄文の基本的なパターンは後期を通じて受け継がれているからである。むしろ、茨城県南部との比較、及び、南関東諸型式との伴出関係をみたほうがよいと思う。

まず、茨城県南部であるが、最近の調査例をみてみよう。

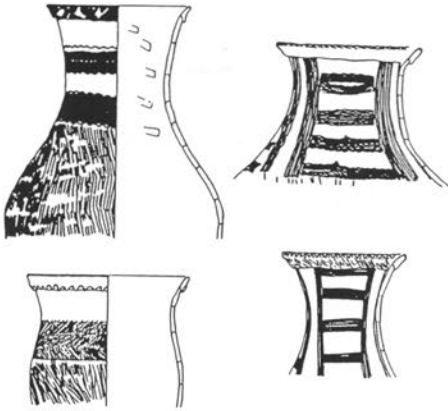
石岡市 — 外山遺跡^(註36)
千代田村 — 松延遺跡^(註37)（志筑遺跡）、上稻吉遺跡^(註38)
牛久町 — 天王峯遺跡^(註39)
竜ヶ崎市 — 屋代A遺跡^(註40)

まず、屋代A遺跡では、(宮ノ台期終末～)古いタイプの久ヶ原式土器と共に、口唇部と胴部に異条縄文を、その他は無文の甕形土器が出土している。このような土器は、佐倉市大崎台遺跡431号住居址や、同飯重新畑遺跡^(註41)でも確認されている。そして成田市関戸遺跡^(註42)では足洗式土器に伴ってこの種の土器（胴部は縄文のかわりに撚糸文）が出土しており、祖形を窺うことができる。また、その出自が北方にあることを示していよう。次に江原台遺跡等、佐倉市周辺では、口縁部（複合口縁が多い）と胴部に異条縄文を施すいわゆる「臼井南式」の甕形土器が多く出土している。ところが、ほぼ同時期かと思われる、千代田村志筑遺跡では、このような土器は認められない。そうすると、稲敷郡～鹿島南部にかけて分布する土器なのであろうか。その意味で、利根川に面する栄町あじき台遺跡例^(註43)は注目し値する。出土した弥生土器には南関東の土器は非常に少なく、①折衷型と②長岡式類似土器、③従来にない新しいタイプの北関東系土器—口縁部に刺突（刻目）列を一段あるいは二段有するもの、簾状文を頸部に施すものであるが、典型的な長岡式類似土器の口縁部下に様々な器具で押捺、刺突（刻目）列を施すものが多いのもひとつの特徴といえる—という三タイプの土器が共存する。この③タイプの土器は、宇都宮市以南の栃木県南地方に分布する二軒屋式土器に最も近似するといつてよい。一ヶ出土した「貼瘤」付土器もその要素のひとつである。しかし、二軒屋式土器は既に論じられているよ



第 2 図 主要共伴遺跡出土土器

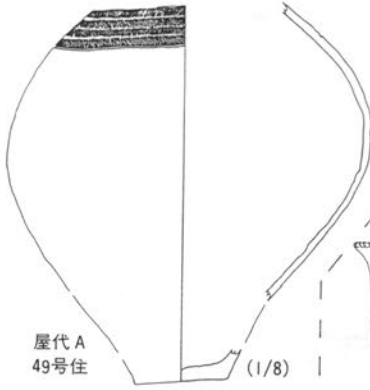
『北関東系土器』の様相と性格



大崎台201号住(1/8)

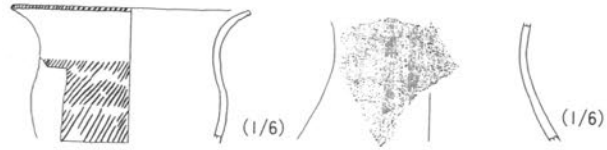


大崎台431号住(1/8)



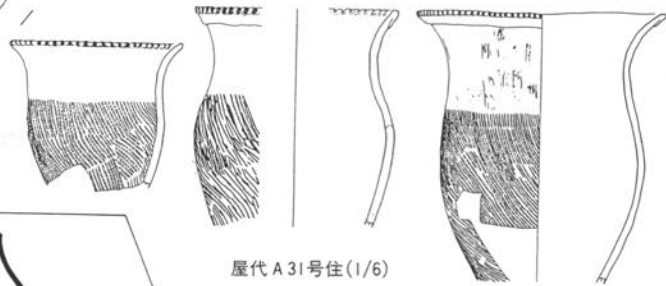
屋代 A
49号住

(1/8)



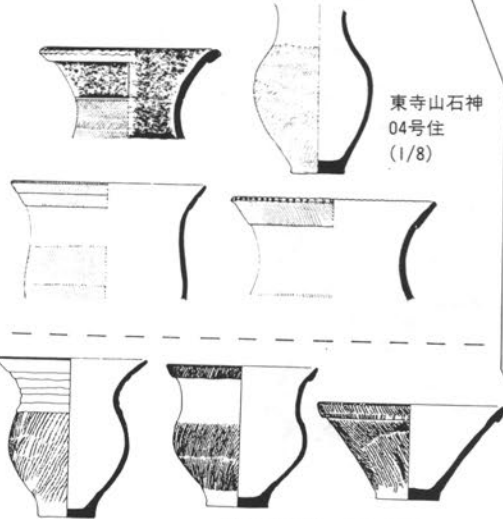
(1/6)

(1/6)

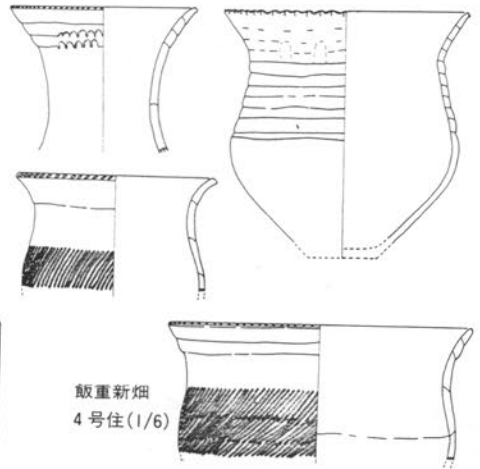


東寺山石神
04号住
(1/8)

屋代 A 31号住(1/6)



東寺山石神37号住(1/8)



飯重新畑
4号住(1/6)

第3図 主要共伴遺跡出土土器

うに、破片の出土例がほとんどであり、その実体については未だ明確になっていない。長岡式土器との関係も、二軒屋式の古い段階に一部併行するであろうという以外は不明な点が多い。また、あじき台遺跡の場合、羽状縄文がみられないこと等、この地方の地域差も十分に存在する。その編年的位置については、伴出した南関東の弥生土器、及び、折衷型土器の内容からして、久ヶ原期の中頃～後半に位置づけられると思われる。

南関東の土器群との共伴関係については、小高の集成がある。^(註44) その主なものは以下のとおりである。

- | | |
|--------------|--|
| 宮ノ台期 | 関戸遺跡 058号住 ^(註45) |
| | 道庭遺跡 方形周溝墓 No.20 ^(註46) |
| | 大崎台遺跡 431号住 ^(註47) |
| 久ヶ原期 | 江原台遺跡 ^(註48) |
| | 調査団調査区域 010号住、025号住、060号住、123号住、123号住 |
| | (神奈川県文化財センター調査区域 Y-1号址 |
| | 臼井南遺跡 ^(註49) |
| | 渡戸B地点 12号住、14号住 |
| | 石神第I地点 23号住 |
| | 飯重新畑遺跡 4号住 ^(註50) |
| | 生谷遺跡 ^(註51) |
| | A地点 1号住、3号住、7号住 |
| | B地点 1号住 |
| | 飯合作遺跡 02号住、04号住、015号住 ^(註52) |
| | 萱橋遺跡 19号住 ^(註53) |
| | 間野台遺跡 16号住 ^(註54) |
| | 古屋敷遺跡 42号住、43号住 ^(註55) |
| | あじき台遺跡 9号住 ^(註56) |
| | 吉高家老地遺跡 17号住 ^(註57) |
| | 米山遺跡 10号住 ^(註58) |
| | 浦部羽下出土土器 (合口壺棺) ^(註59) |
| | 国府台出土土器 (合口壺棺) ^(註60) |
| 久ヶ原
～弥生町期 | 阿蘇中学校東側遺跡 001号住、002号住 ^(註61) |
| | 権現後遺跡 D115号遺構 ^(註62) |
| 弥生町期 | 船尾白幡遺跡 21号住 ^(註63) |

『北関東系土器』の様相と性格

阿玉台北遺跡^(註64) 14号住
権現後遺跡 D004A号遺構
田川遺跡群^(註65)
第3地点 2号住
前野町期
(五領) 白井南遺跡
石神第II地点 2号住
権現後遺跡 D 143号遺構
阿玉台北遺跡 004号住、035号住、021号住
日吉倉遺跡^(註66)
II区 4号住

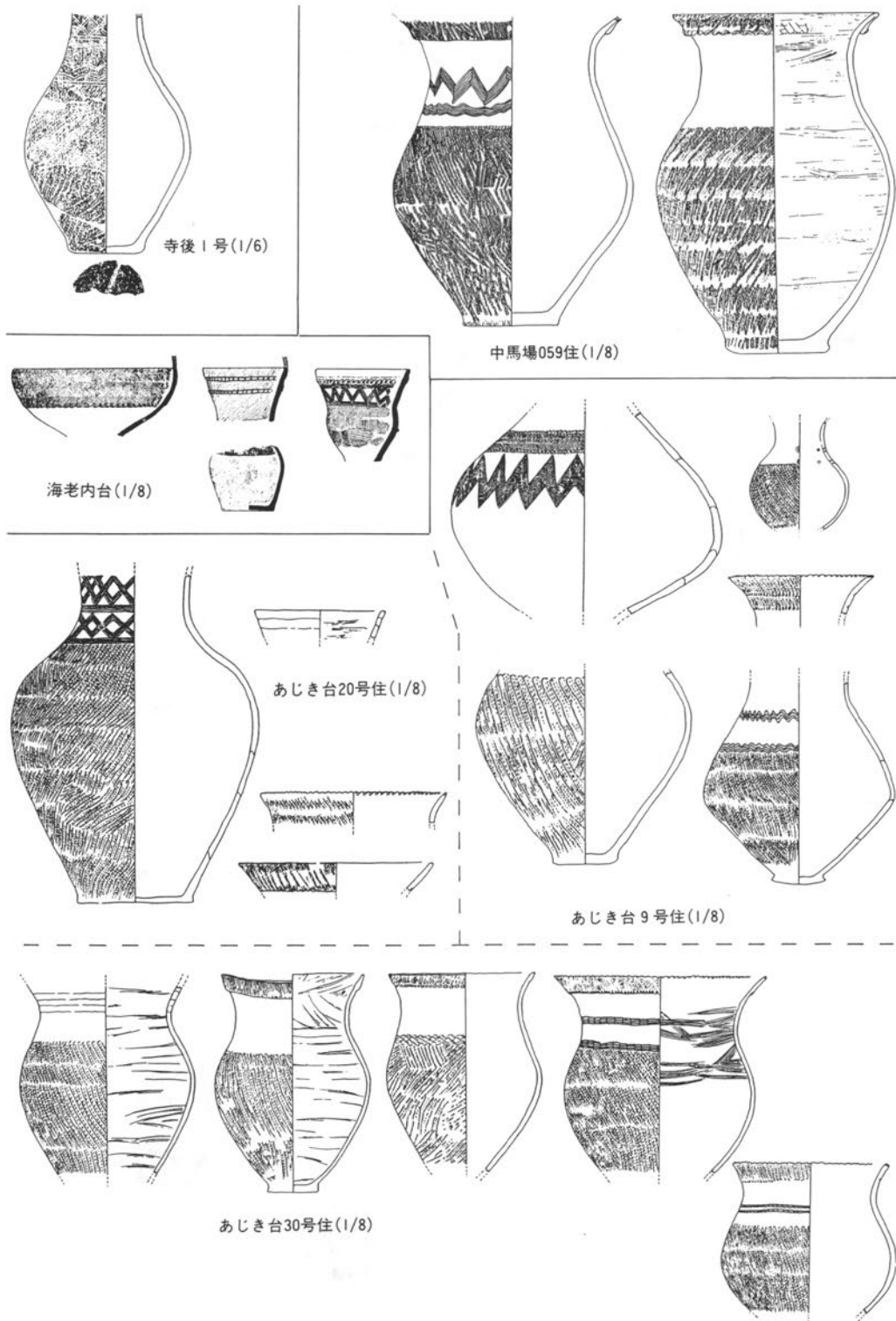
これら共伴関係については図示しているので参照されたいが、そのおおまかな変遷過程が理解できよう。

長岡式類似土器の分布圏 それでは、長岡式類似土器の分布圏はどうであろうか。既にみてきたように、東葛飾地方は長岡式土器の分布圏であろうとした。白井町海老内台遺跡出土の北関東系土器は未だ長岡式後続型式(むしろ二軒屋式土器といってもよいが)で占められているが、印西町や八千代市ではその影響は窺えない。それは以東においてもしかりである。あじき台遺跡の場合も、その一群は二軒屋式類似土器としたほうがよいであろう。恐らく、我孫子市～白井町のあたりに境界があるかと思われる。

長岡式類似土器は型式名で呼ぶべき さて、以上の記述において、長岡式類似土器は空間的にも時間的にも広く長く分布、存在することが明らかとなった。甕形土器以外にも、それに伴う壺形土器等、他の器種の出土例も増加しており、もはやそれらに型式名を与えてよいであろう。長岡式類似といった名称も後期全搬にわたる場合は適当でない。長岡式土器の編年的位置は久ヶ原期の前半にあてるのが正しいと思われる。以後、後半以降は、二軒屋式土器との対比をもって考えたほうがよい。そして、将来、茨城県南部の地において、良好な資料が出土したときに、久ヶ原式～前野町(五領)式に対比しうる型式名を与えればよいのである。

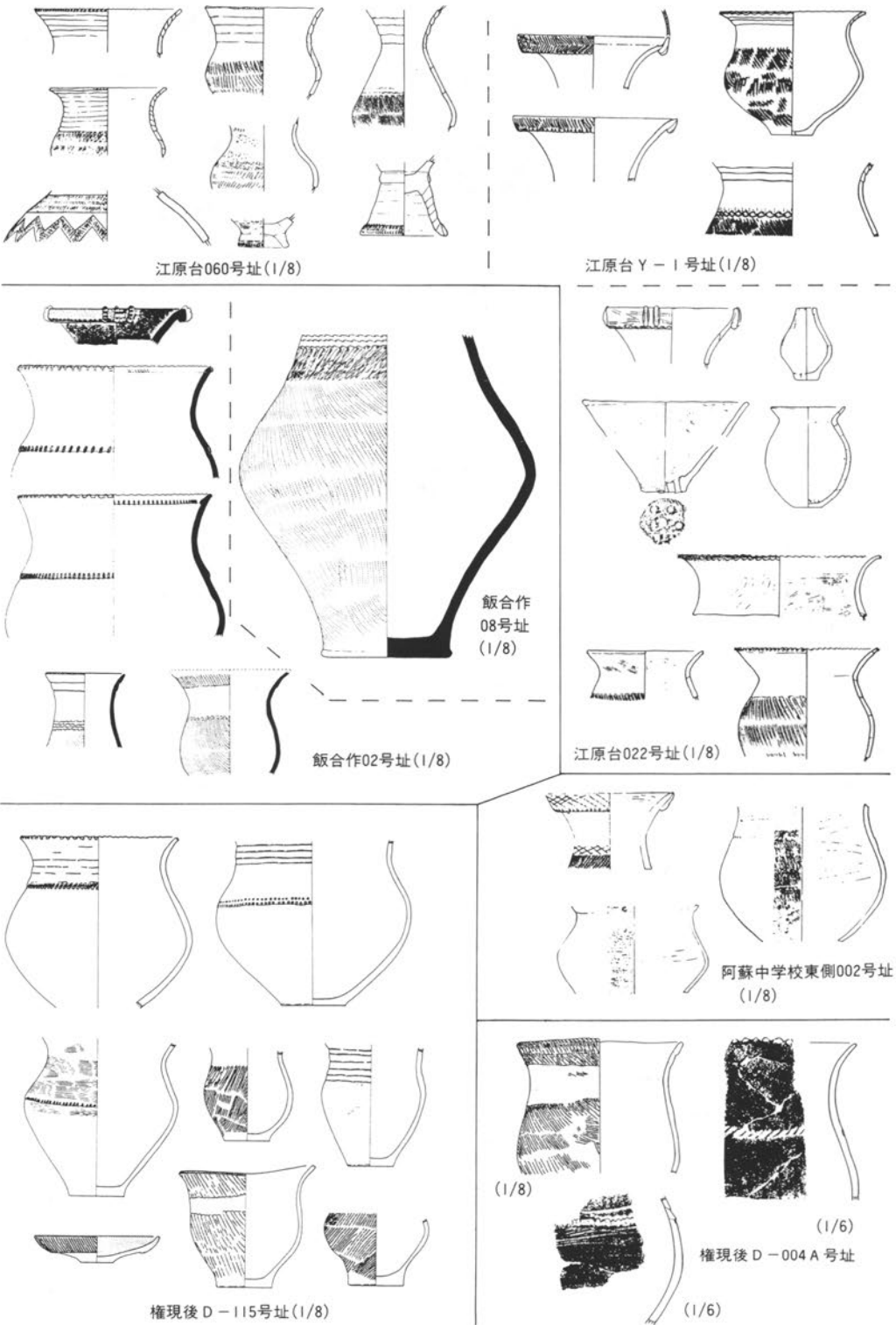
折衷型土器 もうひとつは折衷型土器である。前にあげた南関東の土器との共伴関係、及び甕形土器のパラエティを捉えることから探ってみよう。まず共伴関係では次のように結論づけられる。

- ① その初現は、中期にさかのぼる(成田市関戸遺跡、058号住)が、広く普及するのは久ヶ原期中葉以降であり、その初め頃と推定される飯重新畑遺跡や、生谷境堀遺跡では量的に少ない。
- ② 弥生町期までは確実に存在するが、その後半から出土例に乏しく、前野町(五領)期に

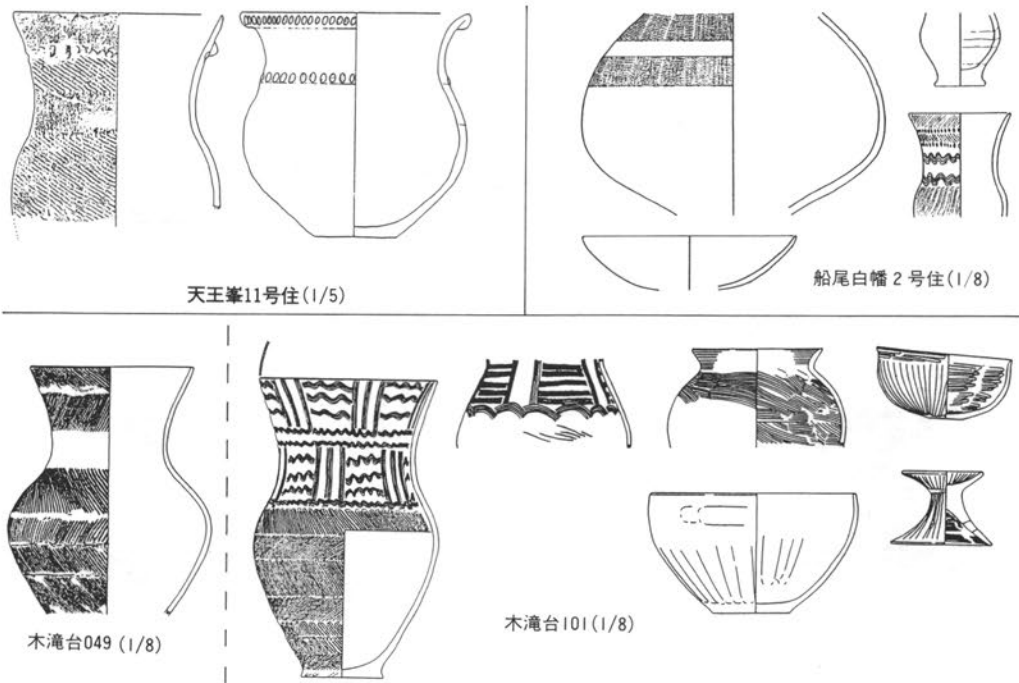


第 4 図 主要共伴遺跡出土土器

『北関東系土器』の様相と性格



第5図 主要共伴遺跡出土土器



第6図 主要共伴遺跡出土土器

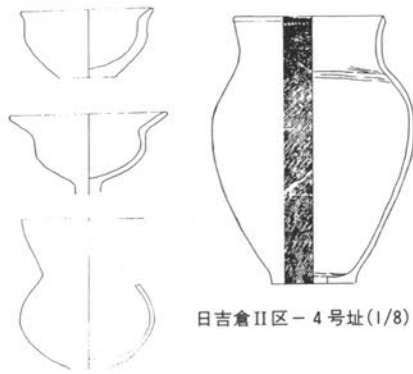
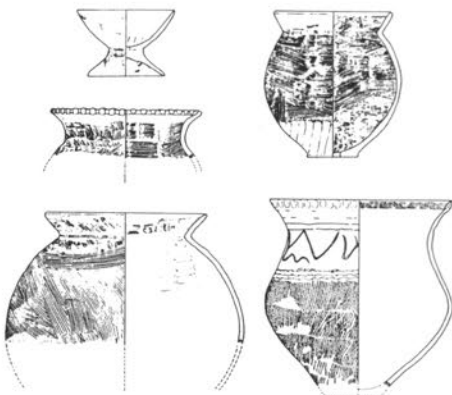
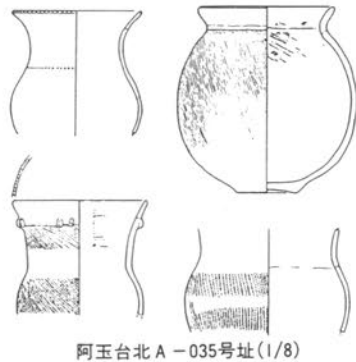
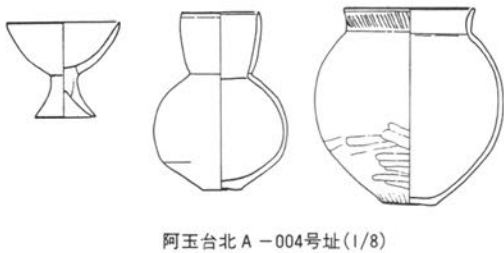
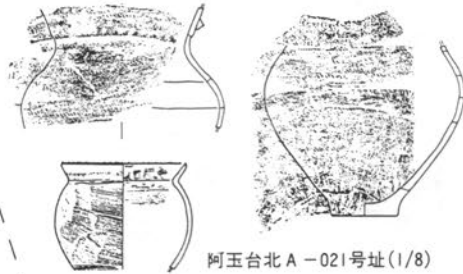
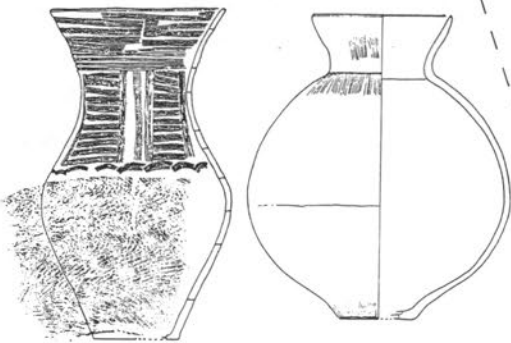
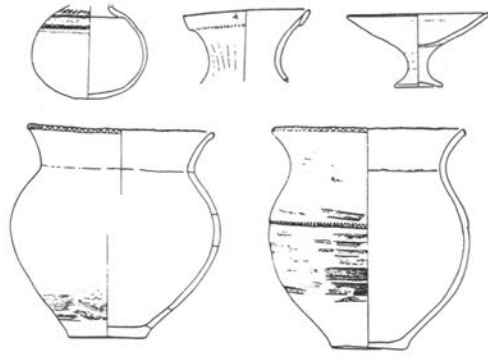
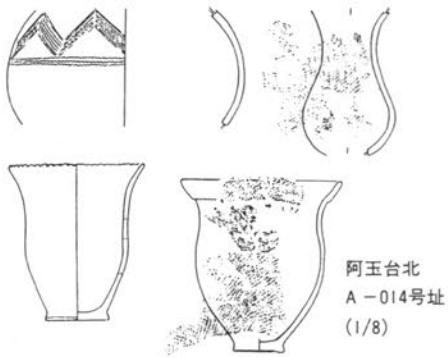
は全くみられなくなる。

③ 壺形土器は存在せず、南関東の壺形土器が伴っている。

次にそのバラエティであるが、南関東の土器の胴部（数は少ないが口縁部）に異条縄文を施すものを主とし、頸部との境界に結節文を用いるものも多い。似た器種に口縁部を複合口縁状に1～2段作出し、口唇部に刻目、あるいは、縄文原体による押捺列を加えるものがあるが、これは折衷型土器に加えるべきではないと思う。器形の点では、小型の特徴的な壺形土器が比較的多く存在する他は、異条縄文を付す壺形土器がまれに出土するのみである。分布については、ほぼ長岡・二軒屋類似土器と一致する（市川～船橋市域の東京湾岸は東葛北部の土器との折衷型が恐らく存在するかもしれない）。この折衷型土器は、現実にとちらともいいがたい区別のつかないものが多くある。しかし、それは南関東土器分布圏との境界に長岡・二軒屋類似土器が成立したこと、そして、更にその接点にこの折衷型土器が存在することを考えてみればよいのではなかろうか。つまり、接点地域の人々は南北両者の土器を使用しており、その南方系の壺形土器に北方系の文様を施したものであって、形式的には別個のものだとりたいのである。

「北関東系土器」の編年的位置づけ 以上、「北関東系土器」の様相について述べてきた。

『北関東系土器』の様相と性格



第7図 主要共伴遺跡出土土器

かつて、漠然と呼称されてきた北関東系土器という名称も、その後、「印旛・手賀沼系式土器」、「臼井南式土器」等の名称が提唱されてきた。しかし、複雑な地域性が明らかになるにつれ、矛盾を抱いた研究者は少なくないと思う。資料の僅少性や限界性もさることながら、弥生時代後期という時代性（それは、土器分布圏そのものの質的变化ともとれるが）、及び、「北関東系土器」の母胎を形成した茨城県南部や栃木県南部の状況が不明瞭であったことによるのではなからうか。

結論として、北関東系土器の地域的な新旧関係（並行関係については厳密なものではない）の試表を掲げておこう。

	南 関 東	東 葛 地 域 (長岡・二軒屋式)	印 旛 以 東 地 域		茨城南部の土器
			長岡・二軒屋式類似土器	下 総 型 土 器	
中 期	宮ノ台式	寺 後 (1号)	関 戸 (044号、058号) 道 庭(方形周溝墓No20) 大 崎 台 (431号住)		屋代A (31号、49号)
後	久々原式	中馬場(59号住) 海老内台	大 崎 台 (201号住) 飯 重 新 畑 (4号住) 飯 合 作 (02号住) あじき台 (9,20,30号住)	江 原 台 (Y-1号址 060号住) 江 原 台 (022号住)	
	弥生町式		権 現 後 (D115号) 船 尾 白 幡 (1号住) 権 現 後 (D004A号) 阿 玉 台 北 (14号住)	阿蘇中学校東側遺跡 (002号住)	天王峯 (11号住)
期	前野町式 (五領)		阿 玉 台 北 (021号) 阿 玉 台 北 (035号) 阿 玉 台 北 (004号)	臼井南石神第II地点 (2号住)	木 滝 台 (101) ^(註67)

北関東系土器の性格

土器の性格という我々は広い意味に受け取りがちであるが、ここで問題とする性格とは、従来特殊なもののみられていた北関東系土器が果たして特殊なものかどうかということである。その判断はしばしば南関東諸型式との対比によってなされ、また、甕形土器は煮沸、壺形土器は貯蔵という「通念」の産物であるといってもよいであろう。千葉県、否、東京湾岸～房総半島南部の地域は、弥生時代において土器の分布圏上独自の位置にあったことを認識する必要がある。それは、広く捉えて、東海地方の土器圏内の東端に位置し、なおかつ、沈線と縄文の伝統的な手法を長く残存させた地域でもあった。一方、北に隣接する茨城県は、その北部では東北地方南部の文化圏に、南部では栃木県から広く関東北部の文化圏にある。そうすると、この

千葉県北部は3つの大きな土器文化圏の接点にあたり、その文化の内容に複雑（混合的）な様相があるのは十分に予想しうであろう。折衷型土器はまさにその産物であり、長岡・二軒屋類似土器とともに、これら両者がお互いの影響下に共存している事情はその意味で当然といえるのではないだろうか。また、これら複雑な様相が後期に至って顕在化したという事実は、もちろん社会的な背景があるのであろう。弥生時代中期宮ノ台期は、関東地方における稲作農業の定着期であると解されている。そこでは、横浜市鶴見川中～下流域、市原市村田川下流域にみられるごとく、環濠にかこまれた集落が間隔をおいて存在し、その外側には方形周溝墓という特定の墓制による群集墓が展開する。あたかもそれは集団間の規制といってもよい現象である。しかし、後期に至ると上記のような「規制」は認められず、遺跡そのものの数は増加する一方、一地域への集中性、継続性は相対的に低下し、不規則に散在する傾向をあらわしてゆく。これは、各々のムラ同士がゆるやかな結合のもとに、独自の行動を開始した結果ではなかったか。集落が台地奥地へ進出するのそのひとつのあらわれと解されるのである。大きな土器文化圏も、子細にみると地域差が認められる。南関東の文化圏と解される千葉県南部の場合も、上総と安房ではやはり地域差が存在し、更に上総でも東京湾岸と太平洋岸ではその様相は異っている。君津市～安房の地域は、三浦半島と同一の文化圏にあるとってよく、甕形土器における粘土紐の盛行、壺形土器における結節文の多用が認められる。しかし、前野町（五領）期に至ると、いずれの地域もより大きな土師器の文化圏に包括されてゆく。南部におけるこのような状況は、北部においても次第に明確なものとなりつつある。「北関東系土器」はこれら二重、三重の要因によって生まれたものと思われるのである。将来は、利根川流域、及び、東葛飾北部地域は茨城県南部の研究と呼応して混乱のない編年の確立がなされることを望む。折衷型土器は、以前私が提案した「下総型土器」と仮称して、その究明に努めればよいと考えている。それは型式としてではなく、ある型式に伴う特徴的な甕形土器の総称と解しておきたいのである。

註

- (1) 稲尾典太郎 昭和12年 「須和田発見の縄文ある弥生式土器」『先史考古学』第1巻第1号
- (2) 菊池義次 昭和36年 『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査（本編）』
- (3) 高橋良治他 昭和41年 「千葉県海老内台遺跡群の調査」 『下総考古学』2
- (4) 杉原荘介・小林行雄編 昭和43年 『弥生式土器集成本編』
- (5) 柿沼修平 昭和49年 「印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡」 『なわ』第13号
- (6) 古内 茂 昭和49年 「房総における北関東系土器の出現と展開」 『ふさ』5・6合併号
- (7) 熊野正也 昭和49年 「南関東地方における弥生文化の研究(1)―佐倉市白井南遺跡出土の土器」 『史館』第4号
- (8) 熊野正也他 昭和50年 『白井南』

- (9) 熊野正也 昭和51年 『臼井南一石神第Ⅲ地点発掘調査報告書』
- (10) 熊野正也 昭和51年 「佐倉市・臼井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの」 『MUSEUM ちば』
第9号
- (11) 深沢克友 昭和52年 「弥生式土器」 『東寺山石神遺跡』
- (12) 深沢克友 昭和53年 「房総地方弥生後期文化の様相」 『研究紀要』 3
- (13) 田村言行他 昭和54年 『江原台』
- (14) 飯塚博和他 昭和56年 『柏市笹原遺跡』
- (15) 加藤修司 昭和58年 「『印手式』予察一型式としての印手式へー」 『研究連絡誌』第4号
- (16) 小高春雄他 昭和58年 『道庭遺跡』 第1分冊
 共伴関係を見るにあたっては、久ヶ原式と弥生町式を併行関係にあるとする見解が最近認められる。私は
 それについては、次の2点の説明をもって答えたい。
 - (1) 文様の特徴は多分にオーバーラップする。久ヶ原～弥生町への移行は、大きな流れの中で理解すべきで
 あろう。同様なことは、宮ノ台～久ヶ原への移行期についてもいえる。
 - (2) 文様、及び、形態の要素は、それがあつかないかではなくて、一地域における変化の流れとして理解す
 べきである。
- (17) 大沢 孝 昭和58年 「下総地方における北関東系土器と称される後期弥生式土器について」 『史館』
第14号
- (18) 浜田晋介 昭和58年 「印旛沼周辺地域に於ける弥生時代後期の様相」 『物質文化』 41
- (19) 熊野正也 昭和60年 「弥生時代後期における小地域土器分布圏の成立—房総半島北部の臼井南式土器
 を中心に—」 『論集 日本原始』
- (20) 飯塚博和他 昭和58年 『埋蔵文化財調査概要Ⅰ—昭和54・55年度—』
- (21) 武部喜充他 昭和60年 『寺向・捕込附遺跡』
- (22) 小松 繁他 昭和56年 『天神遺跡』
- (23) 註5 文献所収
- (24) 柿沼修平他 昭和48年 『京葉』
- (25) 菊池真太郎他 昭和54年 『千葉市城の腰遺跡』
- (26) 註19文献
- (27) 註17文献
- (28) 八日市場市 昭和57年 『八日市場市史』
- (29) 三浦和信他 昭和51年 『吉高家老地遺跡』
- (30) 米内邦雄他 昭和51年 『佐倉市埋蔵文化財報告(2)』
- (31) 鈴木正博 昭和54年 「高野寺畑の弥生式土器について」 『高野寺畑遺跡』
- (32) 海老沢 稔 昭和56年 「茨城県南部域における長岡式・長岡式以後の展開と問題点(下)」 『婆良岐考
古』 第3号
- (33) 川崎純徳 昭和58年 「霞ヶ浦沿岸における弥生文化終末期の様相—特に貼瘤を持つ土器群を中心に—
一」 『婆良岐考古』 第5号
- (34) 海老沢 稔 昭和58年 『松延3・4号墳発掘調査報告』

『北関東系土器』の様相と性格

- (35) 鈴木正博 昭和54年 『『十王台式』理解のために(3)』 『常総台地』10
- (36) 註17文献
- (37) 山本静男 昭和57年 『外山遺跡』 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』
- (38) 倉本富美男、山本貴之 昭和55年 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書1』、註34文献
- (39) 註37文献
- (40) 天王峯遺跡発掘調査会 昭和59年 『天王峯遺跡報告書』
- (41) 久野俊度 昭和57年 『屋代A遺跡』 『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』6
- (42) 桑原 護他 昭和49年 『飯重』
- (43) 谷 旬他 昭和58年 『成田新幹線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II
- (44) 荒木伸介 昭和58年 『あじき台遺跡』
- (45) 註16文献
- (46) 註43文献
- (47) 註17文献、及び、柿沼修平 昭和59年 『大崎台遺跡出土の弥生式土器』 なわ特別号
- (48) 註13文献、及び、高田 博他 昭和52年 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I』
- (49) 註8文献
- (50) 註42文献
- (51) 田川 良他 昭和52年 『生谷』
- (52) 深沢克友 昭和53年 『弥生時代の集落』 『佐倉市飯合作遺跡』
- (53) 註30文献
- (54) 柿沼修平他 昭和52年 『間野台・古屋敷』
- (55) 註54文献
- (56) 註44文献
- (57) 註29文献
- (58) 相川日出雄他 昭和50年 『亀崎・米山遺跡』 『四街道町の遺跡と文化財』2号
- (59) 註2文献
- (60) 坂詰秀一 関 俊彦 昭和38年 『南関東弥生時代壺(甕)棺墓小考』 『立正大学文学部論叢』第17号
- (61) 村田一男他 昭和55年 『阿蘇中学校東側遺跡』
- (62) 加藤修司 昭和53年 『弥生時代』 『八千代市権現後遺跡』
- (63) 古内 茂 昭和51年 『船尾白幡遺跡』 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』V
- (64) 矢戸三男他 昭和50年 『阿玉台北』
- (65) 柿沼修平 千田利明他 昭和55年 『田川遺跡群』
- (66) 浜名徳永他 昭和50年 『遺跡日吉倉』
- (67) 田口崇他 昭和53年 『木滝台遺跡桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (68) 道澤 明他 昭和60年 『成田市松崎白子、大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』

(千葉県文化財センター調査部)